

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4076200205		
法人名	社会福祉法人 正松会		
事業所名	グループホーム 椿の里		
所在地	〒820-0084 福岡県飯塚市椿624番地20	Tel 0948-28-3839	
自己評価作成日	令和03年11月15日	評価結果確定日	令和04年01月10日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<ul style="list-style-type: none"> ・自然に囲まれた高台に立地し、大きな掃き出し窓のあるリビングは明るく開放感がある。 ・食事や環境整備など手作りし家庭的な温かさを感じていただけるようにしている。 ・職員の離職率が低く、経験年数の長い職員が多い。 ・職員 個々の気づきや思い、提案など積極的に話し合い「どうしたらできるか」考えるようにしている
--

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/40/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 北九州シーダブル協会		
所在地	福岡県北九州市小倉北区真鶴2丁目5番27号	Tel 093-582-0294	
訪問調査日	令和03年12月24日		

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

<p>「椿の里」は、特別養護老人ホームやデイサービス、ケアプランサービス、地域包括支援センター併設で、開設20年目を迎える定員9名のアットホームな雰囲気グループホームである。かかりつけ医の受診と法人嘱託医や看護師、介護職員との連携で安心の医療体制が整い、希望があり条件が整えば看取りも行っている。職員が食材を買い出して交代で作る美味しい料理を提供し、声掛けしながら職員も一緒に食べる和やかな食事の時間である。毎年、利用者、家族満足度アンケートを実施して運営に反映し、手描きで温かみのある「椿の里だより」を毎月家族に送付して家族の思いにも寄り添っている。職員を大切に法人の姿勢を反映して「目指せ、定年」を合言葉に経験の長い明るく優しい職員が定着し、帰宅願望の強い利用者の毎夕の一時帰宅を家族と共に支えたり、園庭で楽しむ食事や散歩、個別に行うドライブ等、コロナ禍であっても、利用者の笑顔の為に工夫を重ね、利用者、家族との信頼関係を築いているグループホーム「椿の里」である。</p>
--

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~57で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
58	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:25,26,27)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	65	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,21)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
59	利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:20,40)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	66	グループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,22)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
60	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:40)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
61	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:38,39)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62	利用者は、日常的に戸外へ出かけている (参考項目:51)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	69	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
63	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:32,33)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	70	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
64	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:30)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

〔セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。〕

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	1	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念に基づき今年度も年度目標をつくり実践につなげる努力をしている。しかし、コロナウイルス感染拡大の為、「地域密着型」を意識した取り組みは難しかった	前回の外部評価を受けて理念の見直しについて職員間で話し合ったが、創業者の思いを大切に受け継いでいこうということに落ち着いた。「明るく、家庭的な温かみのあるグループホーム」の理念の下、具体的な年度目標を立て、実践に向けて取り組んでいる。	
2	2	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	新型コロナウイルス感染予防の為地域行事や外出の自粛をしなければならず、日常的な交流の機会がなかった。この状況でも地域のつながりを模索する必要がある	コロナ禍以前は、地域の盆踊りや文化祭等の行事や活動に参加したり、法人として行われる夏祭り、いきいきサロンを通して地域の方との交流を深めていたが、現在は自粛している。小学校の福祉体験教室への参加やボランティア、実習の受け入れも中止の状況が続いている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域のいきいきサロンや小学校での福祉体験授業などが中止となり地域へ還元することができなかった		
4	3	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	感染予防の為令和2年度はすべてが書面会議となった。現状や課題が十分に意見交換できたとはいえないが、委員からの意見や要望は、グループホーム会議で報告し検討した。令和3年度 第2回 第4回は対面で会議を開催した。第5回も対面での会議を予定している	今年度は、緊急事態宣言下の8月を除いては2ヶ月毎に対面での会議を行っている。行事実施報告及び予定、利用者の介護状況、新型コロナウイルス感染対策、身体拘束廃止適正化委員会からの報告を行っている。委員の意見は議事録に残し、サービス向上に活かしている。	
5	4	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	定期的に運営推進会議の会議録や事故報告なども迅速におこない、透明性が保てるようにしている。市からの調査やアンケートなどの回答も遅滞なく報告している。対応困難事例について報告相談し指導を仰ぐなどしている。感染予防対策として保険者からマスクやフェースシールドなどの物品支援があった。	運営推進会議の機会にホームの現状を伝え、意見や情報提供を受けている。事故があれば事故報告を速やかに行い、対応困難事例について相談する等、協力関係を築いている。	
6	5	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	日中の玄関施錠はなく、言葉づかいを含めて不適切なケアがないように日常的に取り組んでいる。帰宅願望の強い入所者への対応については、法人全体で協力している。法人内の委員会や運営推進会議と一体的に身体拘束廃止適正化委員会を開催している。	身体拘束廃止適正化委員会を運営推進会議と一体的に開催している。身体拘束の研修や話し合いを繰り返し行い、職員は、言葉や薬の抑制も含めた身体拘束が利用者にも与える影響を理解し、特に言葉遣いや対応に注意して、身体拘束をしないケアに取り組んでいる。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待の芽や不適切なケアが見過ごされないようチェックリストを用いて自己覚知を促し、お互いに注意し合える職場づくりに取り組んでいる。月ごとの標語を職員が目につくところに掲示し不適切ケアの防止に取り組んでいる。 指定基準改正に伴い虐待防止指針を制定している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8	6	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	内部研修で学んだことを報告し共有化を図っている。事業所内に資料やパンフレットを用意し相談があれば応じられるようにしている。	日常生活自立支援事業や成年後見制度について、職員は内部研修で理解を深め、利用者の権利や財産が、不利益を被らないように取り組んでいる。また、資料やパンフレットを揃え、利用者や家族から相談があれば、制度の内容や申請方法について説明し、関係機関と協力して制度が活用できる体制を整えている。	
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時や改正時には十分な説明をするように努めている。特養など他の施設との違いなど説明し不安や疑問を伺うようにしている。		
10	7	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	毎年 利用者、家族に満足度アンケートを実施しホームの運営に生かすように努めている。コロナウイルス感染予防の為面会制限があり例年に比べて要望や意見を伺う機会がすくなかった。	日常会話の中から利用者の思いや意向を聴き取り、毎年、利用者や家族に対して満足度アンケートを実施して、ホームの運営に反映している。家族面会時や電話等で、家族から意見や要望、苦情等を聴き取り、介護サービスやホームの運営に反映出来るよう取り組んでいる。	
11	8	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	グループホーム会議や法人全体で行われる全体会、代表者会議があり意見や提案を伝える場がある。グループホーム会議では、活発な意見交換がなされている。	月1回19時からグループホーム会議を開催し、業務や運営について話し合った後にケア会議として利用者一人ひとりの処遇について意見交換している。皆が意見を出し合えることを目標にして取り組み、活発に意見が出ている。また、職員ロッカーに付箋を貼って気づきを伝え合い、会議の議題に挙げて話し合っている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員の労働時間や条件にも考慮している。職員間で「ありがとう」があり、お互いの意見や気持ちを伝えあえる環境がある。		
13	9	○人権尊重 法人代表者及び管理者は、職員の募集・採用にあたっては性別や年齢等を理由に採用対象から排除しないようにしている。また、事業所で働く職員についても、その能力を発揮して生き生きとして勤務し、社会参加や自己実現の権利が十分に保証されるよう配慮している	職員の経験値や得意分野が発揮できるように配慮している。採用には、人柄や意欲を優先している。定年まで働く職員が多く離職率が低い。	職員の募集は、人柄、やる気を優先し、年齢や性別、資格等の制限はしていない。採用後は、職員のスキルアップに向けて研修受講や資格取得を奨励し、職員一人ひとりの意欲の向上に繋げている。管理者は、職員一人ひとりの特技や能力を把握し、適材適所に役割分担を行い、職員が生き生きと働きやすい職場を目指している。	
14	10	○人権教育・啓発活動 法人代表及び管理者は、入居者に対する人権を尊重するために、職員等に対する人権教育、啓発活動に取り組んでいる	グループホームの理念や目標達成をめざし人権を尊重する介護ができるように努めている。	利用者の人権を尊重する介護の在り方を職員間で常に話し合い、利用者が持っている個性や生活習慣に配慮し、言葉遣いや対応に注意した介護サービスに取り組んでいる。また、職員は常に理念を意識し、利用者一人ひとりの思いを大切にして、「明るく、家庭的な温かみのあるグループホーム」を目指している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
15		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	今年の外部研修は、オンラインやzoomを使っの新しい研修に取り組んだ。オンライン、zoomにより職員の研修の機会を増やしたい。		
16		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	感染対策の為、電話やzoomを使い情報交換などをおこなった。 オンライン会議や交流会にも積極的に参加している。 グループホーム協議会の地区役員を引き受け、自施設のサービスの向上に還元できるようにしている。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
17		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所初期は、できるだけ声掛けし安心していただけるように支援している。入所時には、ご家族にバックグラウンドアセスメントの記入を協力していただき、職員間で情報共有を図っている。		
18		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入所前の不安や疑問にはできるだけ丁寧に説明し、入所後、説明不足が不信感につながらないように努めている。入所前のケアマネージャーや介護サービス事業所とも連携して円滑にサービスが導入できるよう支援している。		
19		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	初期段階では、細かな点もよく観察し、職員間の情報共有に特に力を入れている。申し送りや連絡帳の活用、個人記録に必要としている支援や処遇内容を記載している。		
20		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	食事の支度や食器の片づけ、洗濯物など、できそうなことを把握し、実施していただいている。 利用者の重度化もあり介助する場面も多く「暮らしを共にする」視点にも欠けていると感じる。		
21		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	感染対策で面会制限が続いている状況で職員と家族との関係も希薄になっている。家族と本人との関係や繋がりがも少なくなっている。便りや手紙、電話以外の方法も検討する		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22	11	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	感染予防の為に馴染みの人や場所との関係が途切れてしまっている。 手紙や電話などは継続して支援したが、友人などの面会はほとんどなくなっている	新型コロナウイルス感染症対策の為に、馴染みの人との関係を継続していく事が難しい状況である。そのような中でも、生活歴等から利用者の話を傾聴し、昔馴染んだ場所に一緒に行ってみたり、本人の菩提寺に出かけてみる等、感染対策をしながら、馴染みの場所を訪ねる支援に取り組んでいる。	
23		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	レクリエーションや食事、余暇時間に利用者同士の関係を把握した上で支援をおこなった。 トラブルが発生した時や発生を予防する為、食席の変更などを随時行った。		
24		○関係を断ち切らない取り組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービスの利用が終了しても、食材やお菓子など頂くことがあり交流が続いている。近況報告をしながら相談などに対応することもある。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
25	12	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	十分とは言えないが、できるだけ本人の思いやその人らしさの支援に努めている。言語表現が困難な方に対しては、表情や仕草、今までの暮らし方からくみ取るようにしている。職員の都合や視点になっていないか折に触れ見つけ改善に努めている。	ホームで共に過ごす中で、利用者の思いや意向を引き出し、本人の言葉を記録して職員間で共有している。意思の疎通が困難な利用者については、家族に尋ね、職員間の気づきを集め、利用者の表情や仕草から、思いを汲み取る努力をしている。	
26		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所時のアセスメント以外に本人との日常会話や家族面会の時にこれまでの暮らし方を何うように働きかけている。又、知り得た情報は共有し、日々の介護に生かすように努めている。		
27		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日常の様子を観察し、ケア記録や月々の要約、モニタリング、ヒヤリハット報告など記録し、現状把握に努めている。		
28	13	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	日々のいろいろな場面で積極的な意見交換ができています。定期的な会議も開催している。ロッカールームに小さなことでも「気づき」を付箋紙で貼っている。直ぐに実践できることは「お試し期間」として直ちに実践し会議で評価、改善をしている。直ぐに対応できない事案については、「会議」で意見交換し実践するようにしている。PDCAの実践に努めている。昨年の反省に基づき家族も参加したサービス担当者会議を開催していたが、面会制限や感染症予防の為に「会議」は途切れている。	職員は、利用者や家族とコミュニケーションを取りながら、意見や要望、心配な事を聴き取り、カンファレンスの中で検討し、職員の気づきを付箋紙に記入してもらうことで吸い上げて、介護計画に反映している。利用者の状態に変化があれば、家族や主治医と話し合いその都度見直しを行っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個人記録や介護日誌、申し送り、連絡帳などで情報共有に努めているが、効率的、整合性のある記録の書き方が課題である。		
30		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	「今の状況に合った対応」を模索し実践を積んでいるが、事業所の多機能化には至っていない。		
31		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	慰問の受け入れやボランティアなど地域資源との関りがコロナの影響でなくなり、楽しみごとの機会をなくしてしまった。		
32	14	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	利用者や家族の希望を優先し受診支援をした。受診時は、健康管理記録や気になる症状を報告し適切な医療が受けられるよう支援した。家族が受診に同伴しなかった場合や緊急などの受診は支援経過で家族と連絡を取り合うなど本人、家族の意向を大切に支援に努めた。	入居前に利用者や家族と話し合い、かかりつけ医の受診支援に取り組んでいる。原則家族に受診同行をお願いしているが、定期的に職員も同行し、情報の共有を図っている。法人の嘱託医や看護師にも必要な時には相談できる体制が整っている。	
33		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	併設施設の看護職へ気になることを相談し医療面のサポートをしてもらっている。		
34		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	令和2年度は入退院がなかったが、例年は入院時にはできるだけ毎日面会に行き、医療スタッフや家族と情報交換等をおこなってきた。退院前にはサービス担当者会議を開催し円滑に退院ができるよう支援していた。		
35	15	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入所時に医療的ニーズに対してできることできないことを説明している。又、入所後もケアプラン作成時など折に触れて、重度化や終末期の対応について意見や意向を伺い「近い将来」を意識した働きかけを行っている。又、家族間でも意見を調整していただくようにしている。医療機関へも事業所としてできること、できないことを説明して方針の共有化に努めている	契約時に、利用者や家族と話し合い、ホームで出来る支援について説明し了承を得ている。利用者の重度化が進むと家族と密に連絡を取りながら、主治医も交えて方針を確認し、関係者で方針を共有し、希望があり条件が揃えば、家族の協力も得ながら看取りにも取り組んでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時や事故発生時はマニュアルに沿った対応をおこなっている。併設施設の職員の協力も得られているが、事業所内でも定期的な訓練や研修は行えないままである		
37	16	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	災害時の備えとして食料の備蓄などを行っている。災害時は法人全体で支援する体制を整えている。地域の自衛消防隊と契約し協力体制はあるが、住民との訓練には至っていない。業務継続計画(BCP)は、現在作成中である	地震からの火災や風水害を想定した訓練を年2回実施し、通報装置や消火器の使い方、非常口、避難経路、避難場所を確認し、利用者全員が安全に避難出来るように取り組んでいる。また、地域の自衛消防隊と協力体制を確立し、いざという時に備えている。非常食、飲料水も3日分備蓄している。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
38	17	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	言葉づかいやプライバシーを損ねないよう日々注意を払っているが、十分とは言えない。定期的にチェックリストで自己を見つめたり、不適切な言動があった時は、お互いに注意し合うようにしている。	利用者のプライバシーを守る介護の在り方を職員間で話し合い、カンファレンスや毎日の申し送り時に確認し、互いに注意し合いながら、言葉遣いや対応に気をつけ、利用者一人ひとりを尊重したケアに取り組んでいる。また、利用者の個人情報の取り扱いや、職員の守秘義務については、管理者が説明し周知を図っている。	
39		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者のコミュニケーション能力を把握し、それに応じた働きかけを実践している。自己決定が困難でも職員が一方的にならないよう表情や仕草から思いを探ったり、ご家族に相談している。入所以前の生活史や成育歴も参考にしている		
40		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	共同生活の為大まかな一日の流れはあるが、本人のペースや希望に応じられるように職員間で協力している。本人が希望しない場合は、無理維持せずに見守ったり場面や時間を変えて対応するなどしている		
41		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	ご本人の好みやその人らしい衣服、清潔感のある物を身に付けていただくようにしている。整髪や口腔ケアも気にかけて、いつご家族などが見ても恥ずかしくないように心がけている。		
42	18	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	できるだけ手作りを基本としている。誕生日は、本人の好物を作り季節の行事や季節感のある食材を提供するように努めている。日常的ではないが、利用者が食材の下ごしらえや調理過程に参加していただいている。気候の良い時は、園庭で食事をしたり、雰囲気を変えるため年に数回ではあるがデリバリーサービスを利用することもある。	食事は、利用者の力の発揮や他の利用者や職員とコミュニケーションを図る場として捉え、下拵えや後片付けを手伝ってもらっている。職員が買い出しから行い交代で作家庭的で美味しい料理を一緒に食べている。天気の良い日には、園庭で食事をしたりデリバリーサービスを利用する等工夫しながら、いつもと違う食事を楽しめるよう支援している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	嚥下、咀嚼能力に応じた食形態にしている。摂食量や水分量を記録し状況に応じ栄養補助食品や代替食品を提供している。水分不足にならないよう、食事以外の時間にも水分を補給している。法人内の管理栄養士からの指導や助言も受けている		
44		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後個人の能力に応じた支援を実施している。口腔ケアに必要な物品(ブラシ、スポンジ、ウエットティッシュなど)も準備している。義歯の洗浄も必要に応じ支援している。		
45	19	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個々の排泄パターンを把握し、声掛けやトイレ誘導を行っている。排泄ケア用品は、時間帯等に応じ選定している。できる限りトイレで排泄ができるようベッドの位置を工夫したり、訴えが困難であってもセンサーの設置するなど自立支援をおこなっている。	職員は、利用者の排泄パターンや生活習慣を把握し、早めの声掛けや誘導を行い、失敗の少ないトイレでの排泄の支援に取り組んでいる。また、全居室にトイレが設置され、一人ひとりの状況に合わせてベッドの位置を考え、重度化しても2名介助でぎりぎりまでトイレで排泄できるよう支援している。	
46		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	食事には、野菜や豆類、海藻類を意識して提供している。水分補給を促したり、ビフィズス菌、乳酸菌入り飲料やオリゴ糖なども活用している。排便の記録には排便時間以外にプリストルスケールを使い適切な管理に努めている。		
47	20	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴に介助や見守りが必要な利用者が多い為時間帯は概ね決まっている。夜間の入浴の希望があっても応じることが現体制では難しい。週6日入浴を実施している。入浴回数は本人の希望で選択している。拒否がある時は無理維持せずに対応している。	入浴は、利用者の体調や希望を優先して毎日入ることも可能であるが、週3回を基本としている。湯船にゆっくり浸かってもらい、その横に職員が座って昔話を楽しんでいる。また、入浴を拒む利用者には、無理強いせず清拭や足浴に変更し、清潔保持に努めている。	
48		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	就寝時間は本人の習慣に応じて対応している。健康面や安全性などにも配慮しつつ照明や空調は本人の好みが優先できるよう工夫している。眠れない時は、温かい飲み物を提供したり、状況に応じ傍に寄り添うこともある。週1回は、リネン交換し清潔を保つようにしている。		
49		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	おくすり手帳や薬の説明書を整備し薬の内容や用量を把握している。薬が変更した時は、連絡帳や申し送り誤薬がないよう工夫したり、症状や状態変化などを記録している。ご家族にも状況を報告している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	個々の能力に応じ、生活歴や希望に応じて少しでも役割や楽しみごと、戸外活動の支援をしているが、更なる工夫や改善を図りたい。昨年度は、感染対策の為その活動範囲が更に狭くなってしまった。		
51	21	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	季節の良い時はご家族にも協力を求め、戸外活動を実施していたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響で自粛せざるを得なかった。日常的には散歩や個別でドライブなどで気分転換をはかる取り組みを実施しているが、利用者からみれば、十分と言えないかもしれない。	コロナ禍以前は、外出レクレーションを季節毎に行い、花見や道の駅、神社に出かけ、外出レクに家族が同行することもあったが、現在は自粛している。園内を歩いたり周辺を散歩したりして出来るだけ戸外に出かけられるよう支援している。また、受診の帰りに家族とドライブして帰ってもらう等、家族の協力を得ながら出かけられるよう支援に努めている。	
52		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	現在 お金の管理が可能な利用者がいない為必要に応じた対応をおこなっている。利用者間でのトラブルになることもあるため予め本人ご家族に相談し対応方法を支援している。		
53		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人の希望に応じ、電話や手紙などの支援を行い、ご家族との関係が継続できるようにしている。特に新型コロナウイルス感染拡大により交流に制限がため積極的に対応をしている		
54	22	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	木造平屋建てで、室内も木のフローリングや腰板の壁があり家庭的な作りになっている。季節感や生活感が感じることができるような壁面制作を利用者と共に制作したり、季節の花を飾り暖かな雰囲気大切にしている。	リビングルームは天井が高く窓も大きく明るく開放的である。利用者と一緒に制作した作品や季節の小物を飾ることで、季節感や温かみのある空間となっている。対面式の台所からは、リズムカルな包丁の音が聞こえ、美味しそうな匂いが漂い、家庭的な雰囲気の共用空間である。	
55		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共同生活であるが、自由に居室で過ごしたり、リビングソファで談話ができる。廊下のソファでは気の合った利用者同士がカードゲームをしたりお話を楽しんだりしている。		
56	23	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	利用者の居室の備品や衣類、寝具等は、使い慣れたものや見慣れたもの、本人が大切にしている物を持ってきていただき心地よく過ごせるように支援している。	入居時に、利用者や家族と話し合い、利用者の馴染みの家具や寝具、テレビや仏壇等を家族の協力で持ち込んでもらい、利用者が安心して穏やかに過ごせるよう配慮している。各居室、トイレも設置され、利用者の状況に応じてベッドの配置にも工夫して、安心、安全に過ごせるよう支援している。	
57		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	利用者の能力に応じ、少しでも「できること」「わかること」が維持できるように工夫している。ヒヤリハット報告や職員の気づきを活かした取り組みを実践し、よりよい処遇やサービスに結びつくようにしている。しかし、安全面と本人の意欲、できることの両立が難しいことも多いと感じている。		